

## 第 14 章 自己点検・評価

るには限界がある、というのが実情であろう。本学の教員個人の「面倒見のよさ」「気配り」に依存せずに、本学の全組織において、問題性の認識とその報告→改善の必要性と方法の検討→改善の命令ないし依頼→改善行為の報告→改善結果の検証とその報告、を組織的に行う体制作りが必要であるといえる。

### 3 自己点検・評価に対する学外者による検証

#### 1) 自己点検・評価結果の客観性・妥当性の確保

(B群: 自己点検・評価結果の客観性・妥当性を確保するための措置の適切性)

(C群: 外部評価を行う際の、外部評価者の選任手続の適切性)

(C群: 外部評価者による外部評価の適切性)

(C群: 外部評価と自己点検・評価との関係)

**【現状の説明】** 本項目では大学基準協会設定の項目「B群: 自己点検・評価結果の客観性・妥当性を確保するための措置の適切性」、「C群: 外部評価を行う際の、外部評価者の選任手続の適切性」「外部評価者による外部評価の適切性」「外部評価と自己点検・評価との関係」について点検・評価を行うべきであるが、既述のとおり本学が外部評価を受けるのは、2000年5月の大学基準協会への加盟判定審査を除けば初めてのことである。1994年施行の「聖学院大学点検評価規程」には、第17条において、「点検評価専門委員会」が点検・評価結果の客観性、正確性及び妥当性の検証のために学外者の意見を求めることができることを規定しており、その体制は整っていると言えるが、実際にはこれまで本学の自己点検・評価作業において学外者による検証がなされたことはなかったためである。

それゆえ、本学は、自己点検・評価結果の客観性、正確性及び妥当性を確保するべく第三者評価機関である大学基準協会に加盟し、今回、同協会に第三者評価を申請するに至った。

**【点検・評価】** 自己点検・評価結果の客観性・妥当性を確保するために学外者による検証を行うという場合、本学独自に、外部から客観的に本学の教育・研究活動を評価できる人材を得ることは非常に困難なことである。本学は、建学の精神や大学の理念を教育・研究活動に具現化することを特に強調し、それを目指した活動を行うことを大学学則にも明確に謳っている数少ない大学である。したがって外部評価者には、本学の全ての活動の背景となる建学の精神や大学の理念、及びそこから導き出される本学が目指すべき方向性が十分に理解される必要があることは言うまでもないことであり、そのために大学側及び外部評価者相互に多くの時間と労力を要することとなるためである。但し、この問題は本学における自己点検・評価が恣意的となり、自己満足で終わることのないためには避けて進むことのできない問題であり、残された課題とすることができる。

**【課題・方策】** 今回大学基準協会の相互評価を受けることとなったが、これは学外の評価者による客観性の確保という観点から望ましいことである。もとより、本学では日常の教育研究、

管理運営を含む諸活動に関して、法人内諸学校の責任者による学校長会において意見を交換し、初等・中等教育レベルからの要望や意見を吸い上げ学内活動に反映させるシステムが確立している。またキリスト教教会関係者や同窓会、後援会、学生採用企業などと定期的に意見交換を行う場を設けているが、大学の社会的責任がますます重要となっている昨今、本学独自に、恒常的に外部者による大学活動の評価を行える体制・仕組み作りを行っていく必要がある。なお、本学はキリスト教大学であるため、外部評価者がキリスト者であることが基本的な要件となると考えられるが、特に専門的な立場から評価に関わる場合には、キリスト者以外からの登用も必要となるであろう。さらに、常に外部の目に曝されるという緊張感のある大学運営をしていくためには、個人情報に配慮しつつも学内の諸情報の公開性、透明性を一層高め、外部者が本学の様々な情報にホームページなどから容易にアクセスできるシステムの構築を進めることが重要であると考えられる。

## 4 大学に対する社会的評価

### 1) 聖学院大学の社会的評価と教育上の特色

(C群: 大学・学部の社会的評価の検証状況)

(C群: 他大学にはない特色や「活力」の検証状況)

**【現状の説明】** 「面倒見のよさ」というものが、大学の教育の質を評価する指標として加えられるようになって久しいが、本学は2000年から連続6年間「面倒見のよい大学」ランキングのベスト20位以内にランクインしており、「面倒見のよい大学」としての社会的評価が定着している（週刊『東洋経済』および週刊『サンデー毎日』の調査による）。

また本学では、早くから社会人を対象とした「公開講座」や「社会人入試」を行ってきたが、「積極的に社会人を受け入れている大学」として社会的な評価を得ている（『2007年度版大学ランキング』（朝日新聞社刊） 全国91位）。

文科系の大学としては、早くからコンピュータ・リテラシー教育に力を入れ、「コンピュータ基礎」を必修化するなど「情報教育」に積極的に取り組んできた点が評価されており、在宅でインターネットを通じて履修していくコンピュータ教育は「聖学院方式」と呼ばれるようになっている（本学のコンピュータ教育への社会的評価については『日経PC21（2001年度版）』日経BP社刊、『模索されるeラーニング——事例と調査データにみる大学の未来』東信堂2005他参照）。

また大学ホームページを通じて入試結果やシラバス、就職実績などについて積極的に情報公開を行っているが、『2007年度版大学ランキング』（朝日新聞社刊）において、全国の大学のWebサイトに掲載された入試、教育に関する項目を調査した「Webサイト・ランキング」において全国39位にランクされるなど評価が高い。